



Title	高齢社会における歯科保健・医療のあり方：急速に超高齢社会を迎えた日本における日本歯科医師会の役割
Author(s)	大久保, 満男
Citation	目で見えるWHO. 2014, 54, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86700
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高齢社会における歯科保健・医療のあり方

～急速に超高齢社会を迎えた日本における日本歯科医師会の役割～

公益社団法人 日本歯科医師会 会長 大久保 満 男



Mitsuo OKUBO

S41年 3月 日本大学歯学部卒業
S42年 4月 歯科大久保医院開業
S60～63年 静岡市歯科医師会長
H12～18年 静岡県歯科医師会長
H18年～ 日本歯科医師会長
H25年～ 日本大学客員教授

1. 我が国の超高齢社会到来の課題

日本は歴史上世界の国がかつて経験したことのない速度で超高齢社会に突入し、さらに今もなお進行しつつある。この世界最速の高齢化とは、高齢者の増加を寿ぐ社会の到来を必ずしも意味しないことに、最大の課題がある。

それを端的に表現するならば、平均寿命の延びに、健康寿命が追いつかないということである。

この困難で、更にわが国の喫緊の課題について、われわれ歯科医師と歯科医師会は、どのような理念と政策のもとに、これを克服しようとしているのかについて、述べてみたいと思う。

まず我が国の高齢化の進行速度は、フランスが65歳以上の高齢者人口が全人口の7%から倍の14%になるまでに115年、それ以外の国々もほぼ半世紀の時間をかけて進行したのに、日本はわずか24年、つまりフランスと比較すると約5倍の速さで進行した。

この高齢化の進行は、死亡者と要介護者の増加を意味する。死亡については、我が国の死亡原因は悪性新生物、次に心臓疾患、そして最近では脳血管障害を抜いて肺炎の順となっている。それに対して、要介護になる病気は死亡原因とは異なり、まず脳卒中、次に脳血管障害、そして認知症、高齢化による衰弱が続くことを確認したい。つまり医療関係者は、死亡に至る疾病の予防と治療と要介護に至る疾病の予防と治療の対策を、一度分けたうえで、更にそれを総合化す

る視点を持つ必要があるだろう。特に要介護者の増加は、言うまでもなく、我が国の男女の平均寿命約82歳と健康寿命72歳の10年の差にあり、これは計算上要介護の状況が10年続くことを意味する。さらに2025年問題と呼ばれるように、団塊の世代が75歳を迎えた時、大都市における高齢化が急速に進行し、大都市特有の孤立化した高齢者の死が、孤独死として社会問題として立ち現れることとなるだろう。このような予測される状況は、高齢者自身も家族もそして社会も重い負担を背負うこととなる。これに対して、われわれ歯科医師は何が可能であり、何を成すべきかを、組織の総力を挙げて議論し続けてきたので、それについて述べることにする。

2. 歯科保健・医療の意義の確立

歯科医療のイメージは、残念ながら未だ、歯を削って詰めて、あるいは入れ歯を入れてという治療に限定されている。これらの歯科治療はあくまで手段であることを強調したい。

われわれ日本歯科医師会は、歯科医療の真の目的を、口の機能を維持・増進させることによって、「食」と「会話」という、人の「生きる力」を支える「生活の医療」であると定義し、それを全国会員の共有する価値として認識することに努めている。

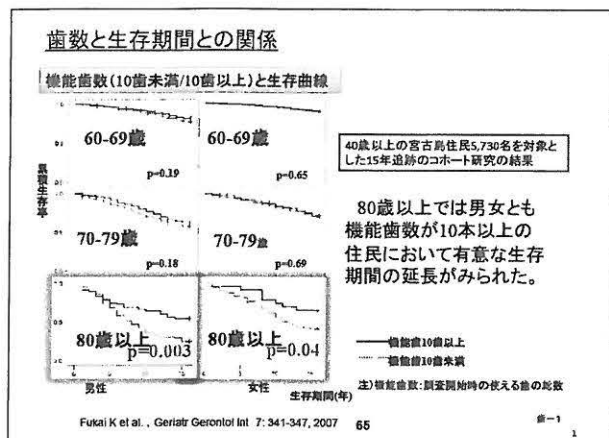
3. 超高齢社会に対する日本歯科医師会の見解

平成18年に会長に就任した私は、このような急速な高齢化の課題に対し、われわれ歯科医師と歯科医療がどのような役割を果たせるか役員と議論を重ねてきた結果を以下に述べることにする。

(1) 健康寿命の延伸と8020運動

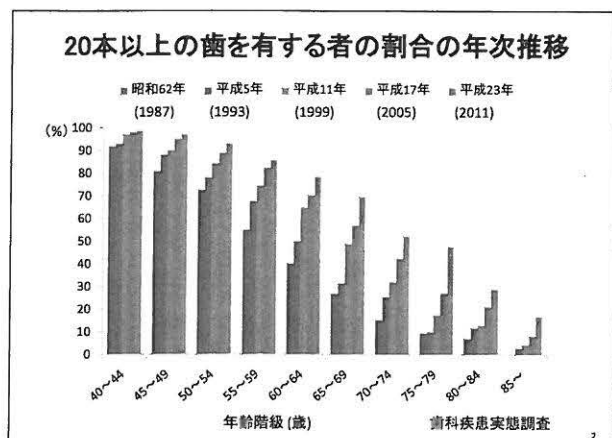
平成元年、当時の厚生省と日本歯科医師会は、80歳になっても20本以上の歯を保持し、健康な高齢者をつくる運動を始めた。しかし多くの歯を保持した高齢者が健康であることの根拠は、歯科医師の臨床経

験からきたものであり、そのEBMとなる調査研究は皆無であった。しかしこの運動の進行は、二つの成果をうみだすこととなった。その一つは、コホート研究による根拠が確立したことである。その一例を図に示した。



(図1 宮古島)

この宮古島における20年のコホートは、歯の保有本数が寿命に関係することを統計的に証明する貴重な研究である。二つ目は、運動の進展により、われわれの当初の予測を超えて急速に8020達成者が増加しつつあることだ。



(図2 8020年次推移)

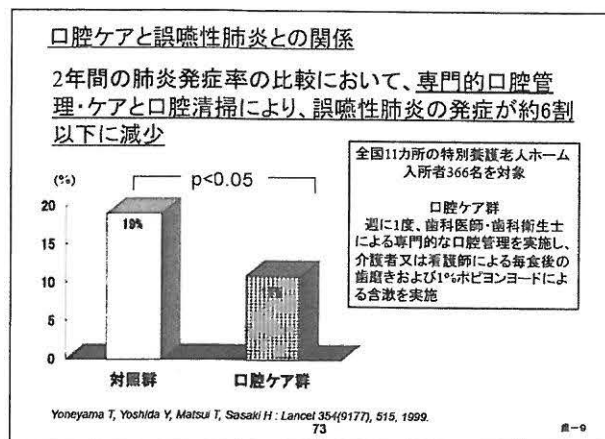
現在、多くの都道府県で8020達成者の表彰が実施されているが、年々その数が増加し、元気な高齢者の姿を見られることは喜ばしいことだと感じている。

(2) 要介護者に対する歯科医療の役割

上記のごとく健康寿命の延伸に努力しても、要介護者が生まれることを避けることはできない。そこで

必要とされるのが要介護者のQOLを守ることであり、そこに歯科医療の役割を位置付けることである。

そのための先駆的な日本の研究が1999年のランセット誌に掲載された。それは、高齢者のQOLを低下させ、さらに死に至らしめる危険性の高い誤嚥性肺炎の予防が口腔ケアの実施によって抑えられるという論文である。



(図3 口腔ケアと誤嚥性肺炎)

この成果は、現在、誤嚥性肺炎のみならず、がん患者を主とする周術期に実施することにより入院期間を短縮させる等、様々な状況に活用され、医科歯科連携の核として注目されている。



(図4 口腔ケアとがん患者入院日数)

(3) 終末期の歯科医療

前述したように、もしも歯科医療が単にむし歯や歯周病の治療を目的としたものであるなら、終末期に歯科が関わることなど考えられもしなかっただろう。

しかし、「食」を支えることが真の目的であるなら、歯科医師の役割は、人生の最後まで自らの口で食べられる人生を送っていただくことにあり、そこに終末期に関わる意義が存在することとなる。

昨年、日本で初めて緩和ケアの施設を開設した淀川キリスト教病院の柏木理事長と共に講演した際に、私の「歯科医療は生きる力を支える生活の医療」であり、最後まで口で食べられることの実現にあるという講演に対し、心に残るコメントをいただいた。それは、柏木先生の高齢の女性の患者さんが「自分は後三日の命」と言った後、「入れ歯の調子が悪いので治したい」と希望し、歯科医師の訪問診療でそれを治してもらった。その翌日、その患者は「もう思い残すことなく、お迎えを待つのみ」と言って間もなく亡くなられた、というお話だった。先生は、三日の命と自覚したその老婦人の生活とは、今生きていることの実感であり、だからこそ今入れ歯の調子を治したかったのだということが、歯科医療の定義を聞いてよく理解できた、とおっしゃった。

その往診した歯科医師は、自分が終末期の医療に関わっているとは自覚していなかったかもしれないが、しかしまぎれもなく、その歯科医師は人の命をおくる場に立ち会っていたのであり、このような超高齢社会の中で、今後ますます歯科医師は終末期に自覚的に関わることとなるであろうし、またその決意を自覚しなければならぬだろう。

4. 「食」の意味と歯科医療

本稿を閉じるに当たり、改めて「食」の人にとっての意味を考えてみたい。

いうまでもなく、人は、動物として食べなければ生き続けることのできない存在である。

これを哲学者・鷲田清一氏は「生きるということは食べ続けることである」と言われた。しかし同時に氏は、そうであるにも関わらず「食べることを拒否する」あるいは「過剰に食べねばすまなくなる」。そんな人の存在を考えた時、「食」は人の存在の中心にあり、人の生きることの核にあるが、動物と異なりとても複雑な意味を持つと書かれた。

確かに、人は、集団の中で、家族や仲間と共に食べる「供食」の道を選び、更に「調理」という文化をも生み出した。しかし同時に、それは動物のように単に生存のためにのみ食べることから、社会と深くかかわる「食」の文化を生み出し、それが逆に他者との交流の中から「拒食症」や「過食症」のような例をも生み出したのだろう。

だからこそ、「食」は、人間の生きることの中心であり、そうであるなら、人生の最後まで自らの口で食べることが自分らしく生きた証の一つとなるのだという思いを大切にして、歯科医療の役割を追い求めていきたい、とわれわれ歯科医師は考え始めている。。